



## 高校野球のマナーとルールを学ぼう (第9回)



財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。  
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

### マナー編 ピッチャーのガッツポーズ。これって…?

一打逆転のピンチを背負ったピッチャーが、バッターを打ち取るたびにガッツポーズを繰り返しています。攻撃側チームを応援して見ている私にはちょっと嫌味に思えますが…。

試合中に手ごたえを感じて「やった!」と喜びの表現につながるのは自然なことでしょう。ただ、何回も繰り返したり、応援席に向かって手を突き出すようなことは「意識的」な行為に思えてなりません。また、相手の失策で出塁や生還する走者のガッツポーズもあり得ないことです。数年来、雄叫びをする投手が目につきます。渾身の力でピンチを脱した気持ちはわかりますが、雄叫びこそは「いつかどこかでやってやろう…」の意識が無ければできないのではないのでしょうか。しかも、「ざまあ見ろ」とか「それ見たか」といった表情は残念でなりません。たとえば、一生懸命に投げて精一杯の空振り、上から見下ろすことも卑屈になることもスポーツマンシップではありません。優勢は倍増に、劣勢は切り捨てて、爽やかに次へ続くエネルギーに形を整えたいものです。グラウンドは教室と同じ学びの場、思いのたけをぶつけ合いながら学びあう場所なのです。公式戦だけを考えれば数少ない試合機会しかない仲間もいます。どんな時もお互いに相手を敬いながら、「闘志をむき出すことは何をしてもよいことではない」と銘記したいものです。

震災からの復興大会となった今春のセンバツでは、応援団の鳴り物を自粛しました。そして、グラウンドでのガッツポーズも雄叫びもなかったことを忘れないでおきましょう。



### ルール編 ハーフスイングへのリクエスト

投手のコーナーを突いた投球を「打者スイング」だと感じた捕手が、球審の「ボール」の判定を聞き、すぐさま一塁塁審を指さしてハーフスイングへのリクエストをしました。でもこの間、球審・塁審ともに何の動作もしません。これはどうして?

審判員のジャッジは最終裁定なので、規則が誤って適用された場合を除いて異議を唱えることは許されないのが原則です。しかし、規則9・02(C)の原注二に、「ハーフスイングの際、球審がストライクと宣告しなかったときだけ監督または捕手は振ったか否かについて、**塁審のアドバイスを受けるよう球審に要請することができる**。球審は、このような要請があれば、塁審にその判定を一任しなければならない。(後略)」とあります。つまり**捕手が塁審の助言を要請する相手は球審**なのです。具体的には、捕手は打者を指さして「スイングです!」や「振ってませんか?」と球審に要請し、それを受けて塁審からのアドバイスで判定されることになります。プロ野球のように捕手が塁審を指さす場面は高校野球にはないのです。

上記の場面では、球審が捕手に説明をし、改めて塁審のアドバイスによる判定の後、試合を続行しました。

なお、バントは定義からするとスイングではありませんが、高校野球特別規則25で**バントの時も同様の扱い**が定められています。

